HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期マルクスの分業論：教育労働・労働者論の視点にかかわって
Author(s)	山田, 定市
Citation	社会教育研究, 6, 45-60
Issue Date	1985-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28447
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P45-60.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

初期マルクスの分業論
－教育労働・労働者論の視点にかかわって－

山　田　定　市

Ⅰ　はしがき

小論は初期マルクスの分業論について，これを主として教育労働・労働者論の視角を定立する立場から，考察の範囲を限定して論及しようとするものである。そのさい，一般にいわれているように教育労働論といわずに教育労働・労働者論ということの意味はのちにふれるが，いずれにしても現実的課題を念頭に置いた古典研究として小論を位置づけている。とはいえ，ここでただちに現実的課題について展開するわけではなく，いわばその予備的考察であるが，さしあたり，その契機についてはふれておかなければならない。このことが古典研究の一環としての小論の視座ともかかわるからである。

第1の現実的契機は，最近，急速に進行しつつある社会教育行政の「合理化」と深くかかわっている。いうまでもなく社会教育における「合理化」は，「行政改革」に沿って事業の縮減，とりわけ社会教育職員の削減を主軸として進められている。その背後には社会教育専門職員の不要論ないしはその専門性を否定する考え方があり，社会教育研究においてもこの論旨と軌を一にする論調がないわけではない。それらの批判的検討が一つの契機となっている。

他方，教育労働者の専門性にかかわって，臨教審を中心にその「専門性」を高めることが必要であり，そのために教員養成にさいしても教員としての専門的技能を高めるための制度上の改変を迫る動きもみられる。このことを第2の現実的契機として重視したい。この動きは，第1の専門性を否定・軽視する考え方とは一見相対立するかのようであるが，教育労働の専門性について狭くしかもゆがめた把握をしているという点では，その根源において共通している。

このように教育労働をめぐる二つの現実的契機についてみても，その基本的理解は，専門労働としての教育労働の形成と定在についての解明をぬきにしてはありえない。

このことにかかわって，さきに，社会教育労働・労働者の存立の重層構造について論点を提示した。(1) その主眼は，ひとつには社会教育労働の形成・展開を学習主体である住民諸階層の労働・生活を基盤に解明することであり，それゆえに，いまひとつには，社会教育労働およびその担い手の存立を重層構造として把握することにあった。

このような論点を深めるうえで，理論的には分業論が重きをなし，さらにそれをふまえた社会教育労働の形成・展開についての実証的研究が不可欠である。初期マルクスの分業論に着眼した動機はまさにこの点にある。

Ⅱ　考察の視点

ここで初期マルクスという場合，それは文字通りマルクスを中心としつつも共同の著作についてはエンゲルスの論述も含む。その際，マルクスとエンゲルスの論述の差異を重視する見方もあり，とくに，分業論にかかわって小論で重点的にとり上げる『ドイツ・イデオロギー』については，両者の論旨の違いを重視する論者もいる(2)。小論では，このことを決して軽視するわけではないが，それは，唯物史観の確立に不可欠な議論として，むしろ異る論点の相互関連を重視したい。

また，ここで初期マルクスの分業論といっても，マルクスの分業論の全面的検討を意味するものではない。それは，第1に，かりに主題を分業論にかぎったとしても，分業はそれ自体，史的唯物論の根幹にかかわる範疇であり，私的所有をはじめとする他の範疇との相互関係をぬきにしては論ずることができないのであり，第2に，マルクスの分業論が経済学の体系の中で本格的に展開されるのは『資本論』においてであり，その意味では初期マルクスにあっては分業論自体が未完成なものであったからである。

しかし，初期マルクスの分業論は，初期なるがゆえに，史的唯物論の体系化における分業の意義がダイナミックに描き出されており，現代においてわれわれが継承・発展させるべき課題も豊富に内包している，ということができる。

さて，上記のことを念頭において，以下でふまえるべき視点は大要次の諸点である。

初期マルクスの分業論の中軸に位置づく著作はエンゲルスとの共同著作『ドイツ・イデオロギー』（1845～46年）であるが，それに先行する諸著作，とくに『経済学・哲学手稿』（1844年,以下『経・哲手稿』と略する）において分業がどのように位置づけられ論じられてきたかについてふれておかなければならない。この点が第1の視点である。次いで考察の主力は『ドイツ・イデオロギー』に注がれるが，ここでは，一部の論者が指摘するようにマルクスとエンゲルスの分業論の差異も等閑視するわけにはいかないが，むしろ，分業をめぐる両者の論点のちがいは，それ自体，分業論としての継承・発展の課題の提示に結びつくものであり，工場内分業と社会的分業とのより精緻な分析の必要性を示すものと理解する。その意味で，このような視点からの考察は小論の主要な論点をなす。むろん，マルクスの分業論は，すでに述べたように，その後，『資本論』で体系的に論じられるのであるが，工場内分業と社会的分業との関連については，初期マルクスにおいても示唆的な論点を含んでいる。

第3に，分業論は窮極的には共産主義社会を展望することに直結する。いわゆる分業の廃絶をめぐる諸問題である。この点に関しては，古くから分業は窮極的には（したがって共産主義社会では）廃絶されるものとして前提されてきたが，それにいたる過程の考察や内容的な吟味は十分になされてこなかった。より現実的には，社会主義体制の下における実態を基礎として，分業の廃絶をめぐる見解の相違がみられることもたしかである(3)。いずれにしても，この論点に関しては，分業が人間（とりわけ労働者）の発達，人間社会の発展にとって，どのような歴史的条件のもとでどのような意義を有するか（阻害作用も含めて）について十分な検討が必要である。

以上のべたような視点に立って，初期マルクスの分業論を検討することは，われわれが目指す教育労働・労働者論の展開にとっても必要なことであるが，それが初期マルクスにかぎられているという点では，あくまでも主題にかかわる前段的作業にとどまっている。

III　疎外された労働と分業

――『経・哲手稿』を中心に――

マルクスが分業について論ずるさいに，彼の労働観がその根底にあって強い影響を与えたことはいうまでもない。ここでその詳細について言及する余裕はないが，次の点については基本的にふまえておく必要があろう。それは，(1)マルクスにとって，労働は人間の必然的な生活手段であると同時に人間にとっての自然必然性であり，(2)それは単に，人間が労働なしに生きていけないからという理由によるだけではなく，労働こそが人間の本質的な生存様式であるからにほかならない。(3)そして，このことは，現実の生きた人間が，一定の感性的・物質的な構造をもった一個の自然であり，その活動の仕方がその特殊な身体的構造に応じた特殊な形態（＝人間の現実的な「生存様式」）をとることを意味している。(4)かくして「諸個人が彼らの生活をあらわす仕方がすなわち彼らの存在の仕方」[4]なのであり，しかも，そのような人間的に特殊な形態での対象的活動としての労働は，自然と人間との一定のかかわりあいのなかで，それに条件づけられ，制約された仕方においてのみ行われる。(5)したがって，現実的な諸個人とは「特定の物質的な，そして彼らの意志からは独立な諸制限，諸前提および諸条件のもとで活動しているような諸個人のこと」[5]である。

このようなマルクスの労働観は，たとえば労働を単に富の源泉としてないしは単なる生活手段としてとらえる国民（古典）経済学とも，また，労働を窮極的に精神労働に還元して考えるヘーゲルの労働観ともすでに決別している，ということができる。[6]

このような人間の本質的な生命活動としての労働が，資本主義的私有制のもとでは「疎外された労働」としてしかありえないことについては『経・哲手稿』の主題の一つとして論述されているところである。それは単に本来あるべき労働からの疎外ではなく，まさに人間の本質的な生命活動が，資本主義的私有制という歴史的制約条件のもとでは疎外された労働としてしか存在しえないこと，そして，かかる労働が人間の現実的な生存様式であることを明かにしているのであり，それゆえ，その歴史的制約条件としての私有制がまさに労働そのものの中から相互規定的に生成・展開されているものとして論じられているのである。このような意味における労働の内実を規定するものとして，さらにそれ自体，疎外された労働（社会性の疎外）としての分業が発生・展開する。

「分業と私的所有」は『経・哲手稿』の主題の一つであるが，このことを論ずるにあたり，マルクスはすでに『ドイツ・イデオロギー』に先だって，分業を社会的生産力の発展，という視点から位置づけている点に注目しておかなければならない。「一国の諸資本と諸収入の増大」は多くの労働が堆積するこ

とによってのみ可能であるが，それは資本が「蓄積された労働」[8]として存在する中において進行する。「資本の累積は労働の分割，すなわち分業をふやし，分業は労働者の数をふやす。逆に労働者の数は，分業が諸資本の蓄積をふやすように，分業をふやす」[9]のである。ここでは社会的生産力の発展と分業との関連が鮮明である。そして，かかる状態におかれた労働者は，お互いの競争関係を激化させ，低賃金，失業をもたらす。「これが労働者にとって最も有利な社会状態，すなわち増進する富の状態の帰結」[10]なのである。アダム・スミスをはじめとする国民経済学者たちは，この点を見失っていたために事態を科学的に把握できなかったことをマルクスは厳しく批判する。ここでマルクスは，人間の本質的な生命活動としての労働が現実に資本主義的営利労働としてあらわれざるをえないという現実をふまえて，疎外された労働の内実を4つの側面から規定する。すなわち，労働者からの労働の産物（それは労働者を牛耳る対象としての）からの疎外 — 第1規定，労働者からの労働（人間の本質的な生命活動としての）の疎外 — 第2規定，労働者の類的本質からの疎外 — 第3規定，そして，その直接的帰結としての人間の人間からの疎外 — 第4規定，がそれである。

疎外された労働をこのように規定したのち，マルクスは，このことが，労働者の労働の産物をわが物とすることのできる非労働者（資本家）の存在によってのみ可能であること，私的所有が外在化された労働の必然的帰結であることを明らかにする。しかし，ここでは，労働の産物がいかにして資本になるかということについては依然として未解明のままである。そのためには，商品交換，貨幣（外在化された私的所有としての）の分析が不可欠であった。いわゆる『ミル評注』がその位置にあり，それを経た『経・哲手稿』の第3手稿において，この課題が一層深められる。これを分業論の側面からいえば，『ミル評注』を経て，社会的分業の視点が深められたとみることができよう。

この『ミル評注』（＝『経済学ノート』（1844～45年）の中で，マルクスは，古典派経済学の再検討を通して商品生産社会における社会的分業の肯定的側面に着目し，また，この分業と交換の形態化として私的所有を把握することができ，その中にあって貨幣はその疎外形態として，いわば外在化された私的所有であるとの認識に到達したのであった。同時に，この貨幣を社会的交通の外在化した形態としてとらえた。分業と交換は「人間的な活動および本質力が類的な活動および本質力としてまざまざと目に見えるかたちで外在化された表現」[11]であり，それゆえに「交換すなわち交換取引は，私的所有の枠内での人間の社会的行為，類的行為，共同存在（Gemeinwesen），社会的な交通（Verkehr）統合」[12]である。ここでは，社会的交通（geselliger Verkehr）を分業（社会的分業）の基盤とする考え方が示されていると同時に，その分業が，社会的富の増大にとって適切，有効な手段である反面個人の能力をそぐものであること，その意味で分業が疎外された労働の内実として示される。このような交換と分業のもとで，「あらゆる富は産業的富，労働の富となったのであって，産業は完成された労働である。……こうなってこそ始めて私的所有が人間にたいするその支配を成就して，もっとも普遍的な形態において世界史的な力となりうる」[13]のである。

「分業と交換が私的所有の形成物であること，まさにこのことのうちに，人間生活はその実現のために

私的所有を必要としたとともに，他面，今や私的所有の廃止が必要であるということ」[14]が明かとなる。しかし，私的所有と分業の廃止の必然性は『ドイツ・イデオロギー』の中でより深く洞察される。

Ⅳ　分業と社会的生産力、交通形態

――――『ドイツ・イデオロギー』を中心に――――

『ドイツ・イデオロギー』によって，マルクスおよびエンゲルスは，唯物論的歴史観をはじめて体系的に仕上げることができたといえる。このことは生産諸力と生産諸関係の弁証法として展開されていることによってはじめて可能となったのであるが，その中で分業は社会的生産力の発展を条件づける中核的な範疇となっている。

「違った諸民族相互間の関係はそれぞれの民族がその生産力，分業および内部的交通をどの程度まで発展させているかによってきまる」[15]と同時に，それは単にある民族の他の民族に対する関係のみならず，その民族の内部的編成全体自体も，その民族の生産とさらには内部的および対外的交通との発展段階に依存することになる。それゆえ，「一民族の生産力がどれほど発展しているかを最も歴然と示すものは，分業の発展度であ」[16]り，これに対応して「ちようど労働の分割のさまざまな発展段階の数だけ所有のさまざまな形態」[17]が存在することになる。

ここでのべられている一民族内部での労働の分割，したがって社会的分業は，(1)農耕労働からの工業・商業労働の分離，(2)その結果としての都市と農村の分離・対立，(3)工業労働からの商業労働の分離，さらには諸部門内部での一層の労働の分割，として進行する[18]。ここでは，分業が，何よりも社会的分業として論じられている点が注目されなければならない。

このような分業の発展に異なる所有形態がそれぞれ対応する。その対応関係は，部族所有 ― 生産の未発達な段階（狩猟，魚撈，牧畜，農耕）＝主として家族内の自然発生的分業，古代的共同体所有および国家所有 ― 農業と工業，都市と農村の分離・対立，封建的または身分的所有〔隷属的小農民〕（都市－組合的所有〔同職組合〕）― 僅少で粗野な耕作と手工業的工業，商業と工業の分割，わずかな労働分割，として示される。これらを経過して，機械制大工業のもとにおける分業の急速な発展とそれを基礎とする「市民社会」に到達するのであるが，このような分業と所有形態に関する歴史的段階規定にひきつづいて，分業の本質的規定ともいえる論述がみられる。第1に，労働の分割が，物質的生産労働と精神的労働の分割として現われる瞬間からその中に労働の分割（分業）の本質を見る。第2に，この労働の分割と同時に労働とその生産物との配与，しかも量的にも質的にも不平等な配与，したがって所有が存在することになる。第3に，この労働の分割と同時に個々の人間または個々の家族の利益と，交通しあうすべての個人の共同の利益との矛盾が存在するようになる。そして第4に，このような労働の分割のもとで，各人は特定の排他的な活動範囲を強制され，そのような社会的活動が固定化されることになる[19]。

この文脈の中で，マルクス・エンゲルスの分業の本質規定が凝集されているということができよう。

分業と所有との関係，およびそれを基礎とする分業の固定化についての枠組みがこの中に示されているのであり，このような認識から社会が全般の生産を計画的に規制する共産主義社会にあっては，このような分業の固定化が克服されることも展望されるのである。[20]

しかし，マルクスの指摘はこれにとどまるものではない。このような共産主義社会への展望が，まさに分業を主軸とする社会的生産力の発展とそれにもとづく社会改革の力の増大によってきりひらかれることを指し示している。労働の分割は，個人に対して強制された分業を固定化し，そのことを基礎にして社会的生産力を発展させるのであるが，「ただ生産力のこの普遍的な発展とともにのみ人間たちの普遍的な交通が実現し，それゆえこの普遍的な交通は一方において『文なし』大衆の現象をあらゆる民族のうちに同時に生み出し（普遍的競争），それら諸民族のそれぞれを爾余の民族の変革に依存させ，そしてとどのつまりは世界史的な，経験において普遍的な諸個人を局地的な諸個人にとって代わらせているからである[21]」。このことなしには，共産主義もまた局地的なものにとどまるほかはないのである。この文脈の中でのべられている局地的な諸個人から普遍的な諸個人への移行は，分業にもとづく普遍的交通が諸個人の発達の契機となっていることにふれている点で重要である。

そこで，われわれは，分業の廃止の道筋を分業の発展過程を基礎としてもう少し堀り下げてみなければならない。

まず，普遍的交通の発達の中で，商業の果してきた役割をマルクスが重視している点に注目しておかなければならない。「ある地方で獲得された生産力，ことに発明がその後，伸ばされることもないままに終わってしまうかどうかはもっぱら交通のひろがりいかんにかかっている[22]」。「交通が世界的交通となって大きな工業を土台にもち，あらゆる国民が競争の渦中にひきこまれていてこそ，獲得された生産力は確実に保ちつづけられるのである」。このような普遍的交通が，より発達した分業としての商業（商人）によって現われてきたことはいうまでもない。これと併行して，工業にあってはマニュファクチュアが生産様式を大きく変革し，その中で分業の役割を決定的なものとした。さらにそれにつぐ「大工業は社会の諸階級のあいだに概してどこでも同じ関係を生み出し，このことによって個々の国柄の特殊性をなくした[24]」のである。

しかし，このような社会的，生産力の発展を労働者の側からみるならば，労働の分割が進めば進むほど，そして資本の蓄積が進めば進むほど，この分裂もますます鋭いかたちをとることになる。そして，この結果として「生産力は諸個人からまったく独立の，もぎはなされたあり方で諸個人とならぶ一つの独自な世界として現われる[25]」。それは，生産力である諸個人の力がただ彼らの交通との連結のなかでのみ現実的力であるのに，現実には彼らはばらばらにしかもお互いに対立して存在しているからである。いまや，私的所有のもとにおける巨大な生産力に対立して大多数の個人が存在する。彼らは生産力をその手からもぎはなたれているがゆえに，「個人として結ばれ合うことができる立場におか[26]」れている。

そのさい，彼らをまだ生産力および彼ら自身の生存と結びつけている唯一のきずなである労働は，自

己表出という意味を失って，労働が生活のための手段としての意味しかもちえなくなっているのである。「いまや諸個人が，存在する生産力の全体をわが物として占有[27]」することが必然的になってきているのであるが，この占有は占有さるべき対象としての生産力によって条件づけられている。生産力の発展した下では，「現代的普遍的交通は万人のもとへ隷属させられることによってしか諸個人のもとへ隷属させられることはできない[28]」。さらに，その占有はその必然的な遂行のされ方によって条件づけられる。それは団結と革命によってのみなしうるのであるが，この場合，団結がプロレタリアートの性格からして，それ自体一つの普遍的な団結であり，革命もまた，「一方では従来の生産様式や交通様式や社会編成などの力を覆えすような革命であるとともに，他方ではその革命のなかでプロレタリアートの普遍的性格と占有の徹底的遂行に必要なエネルギーとが展開[29]」されるものでなければならない。これまでの革命が，働きの分配を変えることを目的としてきたのに対し，共産主義革命は働き方そのものをかえ営利営働を廃絶することを目的として行われる。この場合，革命は「支配階級を倒すにはそれ以外に方法がないからというだけではなく，また倒すほうの階級はただ革命のなかでのみ古い垢をわが身から一掃してし社会を新しくつくりうる力量を身につけるようになるから[30]」である。

このようにして，共産主義革命の必然性とその意義が明かにされるのであるが，この団結と革命の遂行にかかわって共同と共同態，そこにおける人間的自由の意義についてのべられていることが重要である。共同は，労働の分割（分業）の中でばらばらにされ一面的労働を強いられている労働者が，まさに分割によって必然的になった団結を実現するうえでの現実的基礎となるのである。このことについてはすでに『ミル評註』（＝『経済学ノート』）の中で示されているが，『ドイツ・イデオロギー』によれば「労働[31]における自己の生の生産にしても，生殖における他人の生の生産にしても，およそ生の生産なるものはとりもなおさず或る二重の関係として ― 一面では自然的関係として，他面では社会的関係として ― あらわれる。ここで社会的というのは，……ともかく幾人かの諸個人の協力という意味である。したがって或る特定の生産様式または工業的段階はつねに或る特定の協働様式または社会的段階と結びついている[32]」のである。この段階では，協力はまだ私的所有にもとづく分業とは結びついていないのである。

やがて，分業と私的所有についての深い洞察を経たのちに，共同は次のように意義づけられる。「労働の分割による人間的な力（関係）の物的なそれへの転化はこのことにかんする一般的観念を念頭から打ちはらうことによって元のようになくしうるのではなくて，ただ諸個人がこれらの物的な力を元どおり自分たちのもとに隷属させて労働の分割をやめにすることによってのみなくすることができる。これは人々の共同なしにはできない相談である。〔他人たちとの〕共同こそが〔各〕個人がその素質をあらわる方向へ伸ばす方便なのである。したがって共同においてこそ人間的自由は可能となる[33]」。国家などのような見かけ上の共同態ではなく，ほんとうの共同態において諸個人は彼らの連帯のなかで，また，連帯を通して，同時に彼らの自由を手に入れることができるのである。

共同および共同態についてこのように位置づけたうえで，マルクス・エンゲルスは，さらに従来の見

かけ上の自由と真の人間的自由とを対比する。これまでの，一つの階級の諸個人がもつにいたった共同関係は，もっぱら彼ら支配階級の共同の利益をだれか第三者に対して譲るためのものであり，そのような共同関係は「これらの個人をただ平均的個人としてのみ ― ただ彼らが彼らの階級の生存諸条件のなかで生きていたかぎりでのみ ― 自己に所属させていたような共同態であり，彼らが個人としてではなく階級成員として参加していたような関係」[34]にすぎなかった。

これに対し，革命的プロレタリアたちの共同態の場合には，諸個人が個人として参加し，諸個人の自由な発展と運動の諸条件を彼ら自身の掌中ににぎらせる個人の結合（いまの生産力の発展度という前提の枠内での）にほかならない。[35]

いいかえるならば，従来の人間的自由というのは，任意的な結合ではなく，必然的結合のもとでただその都度の生産力と交通形態の枠内で妨げられずに偶然性を楽しめる権利にすぎなかった。そして，一方では，この見かけ上の自由（彼らの生活諸条件の偶然性にもとづく）をめぐって諸個人相互の競争を激化させ，他方では，労働の分割のもとで資本への固定的な隷属が強制される。そのような状態のもとで「一個のプロレタリアの人としてのあり方と，彼に押しつけられた生活条件である労働との矛盾」[36]が彼ら自身の中で明かとなってくるのである。

このようにプロレタアの立場からみた生産諸条件の偶然性と固定性の問題は，これを分業にそくしてみるならば，工場内分業と社会的分業との関連にかかわっている。工場内分業が労働者に対して，労働の分割を通して直接的な隷属を強制するのに対し，社会的分業は，商品生産の無政府性（したがって偶然性）のうえに成り立っているからである。初期マルクスにあっては，両者についてのそれぞれの論及はあるが，その関連を構造的に明かにするまでにはいたっていない。このことはのちに『資本論』，とくに第1巻，第4篇（相対的利余価値の生産）の中で，協業，分業とマニュファクチュア，機械と大工業の論述を経てはじめて鮮明となる。とくにその中でふれられている資本家の独占する指揮・監督労働は，労働者の資本制的隷属の鍵をなすと同時に，機械制大工業は，労働者の社会的結合の物質的基礎をなすものである。工場内分業と社会的分業の双方にわたる労働の社会的編成，分業の廃絶の問題もこのような論述を基礎にして深められなければならないが，さしあたり，初期マルクスにおいて，その枠組みをたしかめておくことも重要である。

V　分業と機械、労働の組織化

――― 『哲学の貧困』を中心に ―――

『哲学の貧困』は，直接にはプルードンの2巻に及ぶ大著『経済的矛盾の体系もしくは貧困の哲学』（1846年）の批判として書かれたものである。[37]この中で，マルクスは，プルードンの観念的で思弁的な歴史把握を，自分の唯物論的な歴史把握と対置し，経済学については，リカードなどの古典派経済学，とりわけリカードの経済学を積極的に評価するとともに，プルードンの価値論がリカード価値論の「ユ

ートピア的解釈」にすぎないと批判した。それと同時にマルクスにとっては，プルードン批判はリカード判批判としての意義を有し，その中で永久的・超歴史的範疇を歴史的範疇として組みかえていく作業を行ない，その過程で，彼の経済学の体系化の基礎をつくり上げ，その成果が『賃労働と資本』(1849年)にひきつがれたのであった。(38)

このようななかで，分業論も一段と前進したということができる。分業の発展が生産手段の発展，それを技術的基礎とする資本の蓄積，集中に条件づけられていることはすでに『ドイツ・イデオロギー』において言及されているが，それが機械および機械制大工業との関連で述べられているのは『哲学の貧困』においてである。むろん，それはその批判の対象となっているプルードンの論及するところとかかわっている。

マルクスはこの点について，『哲学の貧困』の中で「分業と機械」と題して一つの節を設けてプルードンを批判し，このことに関するみずからの見解を明らかにする。分業について，プルードンは分業のよい面（平等をもたらす分業）と分業の悪い面（労働が分割されることによってその目的が否定され貧困をもたらす分業）とを区分するが，その解決の道は分業の有用な効果を保存しながら，その欠陥を削減させる再合成の道であるとする。むろん，プルードンもこれによって分業の欠陥が完全に克服されたとみているわけではなく，ふたたびその悪い面によって否定されるが，それはさらに競争の良い面によって克服されるとみなす。このようにして彼の「系列の弁証法」は果てしなく続くことになる。マルクスは，このようなプルードンの思弁的方法を徹底的に批判する。

分業と機械に関していえば，プルードンの分業についての認識は永久的な一法則として超歴史的な把握にすぎず，それはアダム・スミスの分業論にも及ばない非科学的なものであると批判する。このような非歴史的認識は分業の利点についての抽象的な指摘にとどまらずその欠陥についてのべるさいにも共通している，とマルクスは指摘する。このような認識のもとでは，たとえ分業が貧困をもたらす，といってもそれはいささかも貧困の本質に迫ったことを意味しない。このようなプルードンの認識の超歴史性にふれつつマルクスは次のようにいう。「労働は，それが使う用具の違いに応じて異なる様式で組織され，分割される。……だから，まず，分業一般から始めて，ついで特殊な一生産用具すなわち機械に及ぼうとするのは，歴史と正面衝突することである。機械が経済的カテゴリーでないのは，犁をひく牛が経済的カテゴリーでありえないのと同様である。機械は一つの生産力であるにすぎない。機械の応用に立脚する近代的工場が，一つの社会的生産関係であり，一つの経済的カテゴリーなのである(39)」。マルクスは，プルードンが，分業によって細分された労働の回復・統合を機械に託している点を批判しつつ，彼自身，工場における指揮・監督労働に着眼し，さらに工場内分業と社会的分業の関連について統括的な考察を試みる。この点では『資本論』（とくに相対的剰余価値生産）の分析への枠組みが荒けづりながら形成されつつあり，その中で分業も構造的に把握されつつあったとみることができる。この点をマルクスの叙述によってたしかめておこう。

「社会全体は，社会にもまたその分業があるという点で，工場の内部と共通点をもっている。近代的

工場における分業を典型とみなして，これを一つの社会全体に適用するならば，当の生産にとってもよく組織されている社会は，たしかに，たった一人の企業家だけが指導者としていて，その人物があらかじめ定められた規則に従って共同体のさまざまな成員に仕事を配分する社会であろう。しかし，事実はけっしてそうではない。近代的工場の内部では，企業家の権威によって分業がこまかに規定されているのに反し，近代社会には，労働の配分について，自由競争以外になんらの規則も権威もないのである(40)」。この叙述でも明かなように，マルクスは，『ドイツ・イデオロギー』以降，とくにプルードン批判を通して，資本制社会の経済法則を資本・賃労働関係として把握し，そのような経済学的洞察を通して，分業についても，工場内分業（その組織性）と社会的分業（その無政府性）のちがいと相互関連を認識することができたのである。さらにその歴史的性格を社会的生産力の発展をふまえて，とくにマニュファクチュアから機械制大工業への発展の過程で明らかにしえたのであった。

とくに工場内分業と社会的分業との関連を明かにするうえで重要なことは，(1)一工場内，一生産部門内における労働用具の発達は，その工場内，生産部門内にとどまらず，他の工場，他の生産部門にも及ぶ。とくにマニュファクチュアから機械制大工業へ移行する過程で，このような技術の普遍化は飛躍的に進む。(2)とりわけ，この過程で，資本の集積とそのもとでの労働の細分化を促し，社会全体としての労働編成を大きく変化させる。その際，マニュファクチァ下の熟練労働から機械制大工業のもとでの大量の単純労働の創出（したがって労働の分割自体も変化する）にいたる過程が労働の社会的編成に重大な影響を与える。

このように機械制大工業の技術的基礎をなす機械について，その発達は，マルクスによれば，「簡単な道具，これらの道具の集積，複合された道具，これらの複合道具の，ただ一個の手動原動力による。つまり人間による運転，これらの諸用具の自然力による運転，機械，ただ一個の原動力をもつ機械体系原動力として自動装置をもつ機械体系(41)」という道筋をたどることになる。それゆえ，生産諸用具の集中と労働の分割（分業）とは相互に不可分である。

プルードンにとっては，労働用具の集中は分業の否定であったが，事実はその逆である。「用具の集中が発展するのに応じて分業もまた発展し，分業が発展するのに応じて用具の集中もまた発展する。…機械装置におけるすべての大発明につづいて，より大規模な分業がおこなわれ，分業におけるすべての発展がこんどはまた，機械装置におけるあらたな諸発明をもたらす(42)」ことになる。

そして，このような生産用具の集積と労働の分割の一層の進展の結果，「各種の専門，各種の特殊専門人，および，それらとともに職業白痴を生みだす(43)」ことになる。

他方，自動装置を含む機械体系の発達は，やがて，自動機械工場に到達する。このことを見通してマルクスは次のようにいう。「自動機械工場における分業を特色づけるものは，そこでは労働が特殊的な性格をすべて失ってしまっている，ということである。しかし，すべての特殊的な発展が停止するときいちはやく，普遍性の欲求が，個人の全般的発展をめざす傾向〔努力カードイツ語版〕が，感じとられはじめる。自動機械工場は，特殊専門人と職業白痴を一掃するのである(44)」（傍点―引用者）。分業の進

展の中で,「職業白痴」を生み出すのであるが,機械制大工業のもとにおける自動装置化は,そのような「職業白痴」を削減させる技術的条件をつくり出している。

このことは,オートメーションの発達にともない,労働の質・内容(有用労働)も変化し,監視労働・制御労働の占める度合がしだいに高くなることに照応している。この点については,のちにマルクスが資本論の中でより精緻に分析しているところである。[45] これより先に,すでに分業にもとづく協業,すなわちマニュファクチュアのもとでは,指揮・監督労働が労働過程で必須のものとなり,それが次第に多数化する。これを労働者の側からみれば,これと対置される細分化した労働を強制されつつも,かかる指揮・監督労働を担う管理労働者の出現を不可避とし,他方,同じ事態を資本家の側からみれば,指揮・監督労働が資本家によって完全に独占されることが不可能となり管理労働者を創出し自己の輩下に置こうとする。そして,このような事態は,自動装置化の進展のもとで,企画・監視・制御労働が相対的にその位置を高める中で一層鮮明となるのである。労働者の全体的な発達の技術的条件が拡大される中で,逆に一面的発達を強いられ,社会的労働の編成(工場内の職制,社会的分業を基礎とする労働の社会的編成)が労働者相互の競争を一層激化させる(強制的な配置換え,失業など)ことになる。ここに労働の社会化と労働者の貧困化の同時併行的進行,その内的関連を見ることが必要であろう。

協業,分業にもとづく協業,機械制大工業と技術・生産力が発展する中で,その一環として労働の分割もまた一層細分化され,社会的に一層普遍化してきたのであるが,いまや自動機械工場の段階が示すように,労働の分割という労働編成原理自体が,技術的ならびに社会的に不合理な存在となりつつあり,その廃絶が必然となると同時に,それを実現する客観的・主体的条件も前進するのである。「分業の廃止は,交通と生産諸力とが発展して,私的所有と分業がそれらにとって桎梏となるほどの普遍性にまで立ちいたることを条件としている[46]」のである。

分業と機械の発展にともないま一つの重要な課題は労働の組織ないし労働の組織化の問題である。マルクスはこの点について『ドイツ・イデオロギー』の中でマックス・シュティルナー『唯一者とその所有』を批判の対象としつつ,とくに結社にかかわる「労働の組織」の節で,シュティルナーが「人間的労働」と「唯一の労働」とを区別し,前者は誰でもなしうる労働であるのに対し後者は「唯一者」のみがなしうる労働であるとし,労働の組織化とは,人間的労働(機械労働)についての組織化であると共産主義ととりちがえている点を批判し,そのような労働の区別と組織化が全く根拠のないことを明らかにする。シュティルナーによれば,たとえば,「唯一の労働」としては芸術家の労働がひきあいに出され,それに「人間的労働」としての機械労働が対置され,それが個人の能力とかかわって説かれるのであるが,それは,一般にいわれる精神労働と肉体労働にもかかわる問題である。ミュティルナーの叙述にふれたのちマルクスは次のようにいう。「芸術的才能がもっぱら個々人のみに集中し,このことと連関してそれが大衆においては抑圧されるということは,分業の結果である。たとえある種の社会的者関係のなかでは各人がすぐれた画家であるとしても,それでもまだこのことはけっして,各人はまた独創的な画家でもあるということを排除しないであろう。共産主義社会組織にあっては,芸術家をまったく

分業から生じる地方的また国民的な限られた枠内に入れるとか，個人を特定の芸術の枠内に入れてその結果個人がもっぱら画家，彫刻家等々であり，すでにその名称が彼の仕事のうえの発展の偏狭さと彼の分業への依存とを十分に表現しているようなこととかは，いずれにしてもなくなってしまう。共産主義社会においては，画家などというものはいなくて，せいぜい他にもいろいろすることがあるが，なかんずくまた絵を描くこともする人間がいるだけである」[47]。この叙述を機械的に受けとるとかえってマルクスの真意をそこねることになるが，このような共産主義社会における労働の配置にあたっては，すでにマルクスがアダム・スミスの言葉によって指摘していること，「いろいろの職業に従事する人々を，彼らが壮年に達したときに差別づけるように思われるところの，これらの実にさまざまの天分は，分業の原因であるよりも，むしろその結果である」[48]との考え方に立っており，のちに，労働能力を形成するうえでの教育の意義があらためて明かにされることになる（『資本論』第1巻，第4篇）。

分業を前提とする労働の組織化ではなく，分業の廃絶を実現し諸個人の全面的発達を基礎とする労働の組織化こそが，分業にかわる労働の社会的編成の原理であるが，そのような変革の条件は，まさに資本主義の下で準備されるのである。

VI　今後の課題

事態はふたたび現実にたちかえるのであるが，こんにちの技術・生産力の発展とそのもとにおける労働力の社会的編成の複雑な進行に着目するとき，これを分業にかぎってみても初期マルクスの時代とは異った事象に直面し，そこに現代的な性格と構造を見るのであるが，すでに初期マルクスにおいて指摘された事態とその本質が基本的にしかも一層広範かつ鮮明に貫いていることもたしかである。

生産用具の発達と労働の分割の細分化が一つの工場や生産部門をこえて社会的規模で進行することはすでに初期マルクスにおいて指摘されているが，そのような事態は，現代社会では，広範かつ急速に進行しつつあるといえる。ロボット・ＯＡ化時代といわれるこんにちの事態がそのことを端的に示している。その中における労働の細分化は，職種，免許・資格の多様化をはじめとしていっそう顕著になりつつあると同時に，そのことが開発された技術の部門をこえた急速な普遍化と併行して進行している。

このような事態をふまえるとき，工場内分業と社会的分業の分業としての性格・構造の相違を重視しつつ，さらにその相互にわたる技術・労働力の関連・稼動に関する分析が不可欠である。この点がさらに発展させるべき課題の第1としてあげなければならない。実態をふまえた分業概念の豊富化が全社会的（世界的関連も含めて）構造において分析されなければならない。

第2に，分業にかかわる枠組みとしての精神的労働と肉体労働の区別は，依然として基本的であり，げんに有効であるが，その内実は大きく変化しつつあり，相互に入りくんでいる。機械（とりわけ自動機械装置）の発達にともなって，労働者が直接に物質的生産にかかわる度合が少なくなる傾向が生じ，監視・制御のための労働や企画・プログラミングなどの労働が重きをなすようになるが，このことは労働

の一層の細分化とその相互のいり組んだ関係をつくり出し，労働者の労働内容にも波及する。このような中でげんに，精神的労働は，特定の労働者に固定化して担われているが，そのこと自体が非合理的であり，いまや生産力の発展の桎梏となりつつある。その意味では現代の精神的労働は全労働者の課題である。(49)

第3に，このような教育労働を位置づけようとする場合，それはまぎれもなく精神的労働としての性格を有し，それ自体，社会的分業の一端に位置づいているのであるが，この教育労働をめぐる従来の議論は，とかく概念規定が先行し，それによって教育労働を性格づけようとする傾向が強かった。しかし，初期マルクスの分業に関する分析が示すように，分業が社会的に定在するに至る形成過程が分業の性格と構造を明かにするうえではきわめて重要である。その意味では，教育労働，および教育労働者の形成過程に関する歴史的・実証的分析がその基礎に置かれなければならない。そのさい，教育労働についての概念的な整理も重要であるが，労働者・勤労諸階層の生産労働，生活活動の中において学習・教育活動がどのように形成され，どのような発展をとげるか，ということの理論的・実証的解明が不可欠である。

そのさい，教育労働は直接的生産労働と異り，その労働の分割が直接的に生産用具の発達に規定されるわけではないが，しかし，教育労働の形成の基礎をなす生産労働自体が技術・生産力の発展と直接的にかかわるので，社会的生産力の発展とそれに条件づけられた分業の展開が教育労働の形成・展開を基本的に規定している，ということができる。このことがさらに解明すべき第3の課題である。

そして，第4に，教育労働の形成・展開について分析する場合，それは単に生産労働を基礎とするだけではなく，労働者・勤労諸階層の生活過程に立入った解明が必要である。これは，従来の経済学では依然として未解明の領域であり，教育労働は，このことに直接かかわることを避けることができない。資本に拘束された労働時間と自由時間，生産的労働と生活にかかわる労働との関連，など検討すべき課題が多い。分業にかぎってみても，その発生の起源とされている自然的分業は，家族，部族・共同体（そのいずれが分業の発生の起源であるかをめぐって議論となった），その成員の生産・生活活動に関する一層の検討を要する内容を含んでおり，教育労働の形成とも深くかかわっている。

さて，最後に，生産手段の絶えまない発達とともに進行する労働の分割のもとで，真の人間労働の形成・展開はどのように見通されるのか。たとえば，機械労働がオートメーション化の中でたえず人間の助力なしの機械の機能に置きかわる過程で，人間的労働はいかなる定在を示すのか（マルカスはすでに自動機械装置が単に「機械的機関」にとどまらず，「知的機関」に及ぶことを指摘している。『経済学批判要綱58ページ，一考える機械の登場ー）。人間性と人格の形成にかかわって労働そのもののあり方が，その歴史的・具体的な変貌の実態を通して問われることになる。分業の廃止の問題についても，このような論点，実態と無関係に，分業の廃止そのものを目的化することな許されない。専門労働としての教育労働の定在についての見通しも，分業の廃止を直結するだけでは問題の解明はいささかも前進しないのである。

精神的労働に関する分析は現代の分業の枢要な問題であるが，その中にあって，教育労働は，それ自

体の内実にそくしてみても，また他の精神的労働，生産労働，さらに諸個人の生活とのかかわりにおいても，キー・ポイントとなる検討課題であり，初期マルクスの考察を通して，そのための予備的作業がようやく着手された段階にすぎない。

註

(1) 山田定市「社会教育労働・労働者論の基本視角－住民諸階層の学習要求・課題を基礎にして－」（北海道大学教育学部社会教育研究室『社会教育研究』，第5号，1984年，所収）

(2) この論点に関しては，たとえば望月氏の次の論稿に示されている。望月清司「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」（『思想』，1968年12月号，岩波書店）

(3) たとえばソ連邦科学アカデミー『経済学教科書』によれば，精神労働の働き手と肉体労働の働き手が職業的に分かれている状態については消滅を予想しつつも，あらゆる分業が廃絶されるものではない，という見解に立っている（同書，邦訳，合同出版，第4分冊，1026ページ）。このような議論も含めて，社会主義さらには共産主義のもとにおける分業の行く末については多くの議論があるが，とくにこの点については次の論稿が示唆に富んでいる。中野雄策「社会主義社会における分業と階級」（藤田勇編集『講座　史的唯物論と現代6　社会主義』，1979年，青木書店，所収）。

(4) マルクス・エンゼルス『ドイツ・イデオロギー』（マルクス・エンゲルス全集，邦訳，大月書店，第3巻）17ページ

(5) 『ドイツ・イデオロギー』（全集，同上）21ページ

(6) マルクスの労働（人間）観については，次の論稿が示唆的である。有尾善繁「マルクスの人間観」（日本科学者会議大阪支部哲学研究会『科学と人間』第7号，1981年，所収）

(7) マルクス『経済学・哲学手稿』（全集，邦訳，第40巻）392ページ

(8) マルクス『経・哲手稿』（全集，同上）392ページ

(9) 同上，392ページ

(10) 同上，393ページ

(11) 同上，483ページ

(12) マルクス『経済学ノート』（杉原四郎，重田晃一訳，1962年，未来社）101ページ

(13) マルクス『経・哲手稿』，全集，邦訳，454ページ

(14) 同上，484ページ

(15) マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』（全集，邦訳，大月書店，第3巻）17ページ。

(16) 同上，17ページ

(17) 同上，18ページ

(18) 同上，18ページ

(19) 同上，27～29ページ

⑳ マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』(全集，邦訳，大月書店，第3巻)，29ページ。

㉑ 同上，31ページ

㉒ 同上，50ページ

㉓ 同上，51ページ

㉔ 同上，56ページ

㉕ 同上，62ページ

㉖ 同上，63ページ

㉗ 同上，63ページ

㉘ 同上，64ページ

㉙ 同上，64ページ

㉚ 同上，66ページ

㉛ マルクス『経済学ノート』，前掲書，96ページ

㉜ 『ドイツ・イデオロギー』，前掲，25ページ

㉝ 同上，70ページ

㉞ 同上，70ページ

㉟ 同上，71ページ

㊱ 同上，72ページ

㊲ 『哲学の貧困』の理解にあたってはマルクスがアンネンコフにあてた手紙も示唆に富んでいる。全集，邦訳，第4巻，562～573ページ

㊳ 『哲学の貧困』の位置づけについては，遊部久蔵・杉原四郎他編集『講座経済学史Ⅲ，マルクス経済学の生成と確立』の第1部マルクス経済学の生成，第1章 1840年代(重田晃一)を参照されたい。

㊴ マルクス『哲学の貧困』(全集，第4巻)，154ページ

㊵ 同上，152ページ

㊶ 同上，158ページ

㊷ 同上，158－159ページ

㊸ 同上，162ページ

㊹ 同上，163ページ

㊺ マルクス『資本論』，第1巻，第4篇，相対的利余価値の生産，第13章第1節，機械の発達を参照されたい。全集，邦訳，大月書店版，23(a)，485～503ページ。

㊻ マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』，(全集，邦訳，大月書店版，第3巻)，475ページ

㊼ 同上，424～425ページ

(48) マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』(全集，邦訳，大月書店版，第3巻)，150ページ。

(49) このような視点から，たとえば芝田進午氏が中心となって，現代の精神労働について精力的な考察と分析を進めている点は高く評価できる。その中で掲示されている論点を正しく批判・継承・発展させることが大切である。

双書『現代の精神的労働』における教育労働，公務労働，医療労働，科学的労働に関するシリーズ（いずれも青木書店刊）。

また，現代の精神的労働と社会業的分業に関する考察としては，川口清史「現代の社会的分業と精神労働（上・下）（『現代と思想』 №27，№30，所収）が示唆に富んでいる。